

日本キリスト教会大阪北教会

2017年4月9日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書19章28～42節

19:28 この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして聖書の言葉が実現した。19:29 そこには酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソプに付け、イエスの口もとに差し出した。19:30 イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。19:31 その日は準備の日で、翌日は特別な安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架の上に残しておかないために、足を折って取り降ろすように、ピラトに願い出た。19:32 そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた最初の男と、もう一人の男との足を折った。19:33 イエスのところに来てみると、既に死んでおられたので、その足は折らなかつた。19:34 しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。19:35 それを目撃した者が証しており、その証しは真実である。その者は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている。19:36 これらのことが起こったのは、「その骨は一つも砕かれない」という聖書の言葉が実現するためであった。19:37 また、聖書の別の所に、「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」とも書いてある。19:38 その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちの恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが、イエスの遺体を取り降ろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。19:39 そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。19:40 彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ。19:41 イエスが十字架につけられた所には園があり、そこには、だれもまだ葬られたことのない新しい墓があった。19:42 その日はユダヤ人の準備の日であり、この墓が近かったので、そこにイエスを納めた。

説教 『今やすべての事が成し遂げられた』

◆今日の日曜学校ではヨハネによる福音書10章11節の「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」というイエス様の御言葉で説教しました。今日は小さい子どもはいなくて、一番下で小学校5年生、それから今春高校へ進学する子どもを含め6人でした。この御言葉をみんなで読みました。すると子供がすぐに、「命捨てるなんていややわ」と言います。それからなんの話になって行ったかと言うと、今の世界の情勢で本当にもう、危しい情勢になっている。どうしたら平和を築くことができるのかに話が及んで、イエス様の周りにも何千という人が集まって、荒野で食事をしたという話があるけれども、その中の男の人たちは列を組んで座ったとマルコ伝に書いてあるけれ

ども、「なんで分かる？」と聞いたのです。「列を組む」というのは軍隊ですよ。ですから、ヨハネ福音書の6章15節にはこう記されています。「イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた」と。イエス様が本当にその気になって彼らのリーダーになられれば、ローマ帝国相手に戦争になる。そしてこのリーダーのためなら命を落としても惜しくないと思う人がたくさんいた。けれどもイエス様はその道を取られず、捕えられて十字架につかれて殺されたのです。ここにしか戦争を食い止めて平和を造り出す道はないのではないのか。いつの時代も、争いを武力で納めることはできません。そんなことを子どもたちに話しました。私はその時、フランスのアランという思想家の『定義集』のことを思っていました。この本は岩波文庫でも出ているのですが、その中でキリスト教の定義をしています。「キリスト教は十字架の精神の涵養である」と。「かんよう」という字は心が広い意味の「寛容」ではなく、「涵養」です。物事が徐々にしみ込んで養われていくことです。キリスト教というのは、十字架の精神が、イエス様の御心が、本当に、徐々に、徐々に、しみ込んで、養われて行く以外にないのです。

◆ところで私たちは今、受難週を迎え、おのずからイエス様の十字架上の御言葉、「七言」に思いをいたしております。「十字架上の七言」は今日の週報の3段目にしるしておきました。前回の炊き出し・祈禱会の時に、「七」が「完全数」で、「すべて」を表わすというお話をしました。なぜ「七」が「完全」で「全て」なのか。当時の世界観というか、宇宙観は、「天・地・地下」の三層の宇宙観でした。そして「東・西・南・北」の四つ。これは昔も今も変わりありませんが、三層と東西南北、足して七になるわけです。それで「七」が「全て」で「完全」なのです。それで、イエス様の十字架上の御言葉は4福音書で七つなのです。イエス様の十字架の御言葉は、実際はもっと多かったのではないのでしょうか。しかし摂理によって、聖書には、七言だけが明記されております。そして今日の箇所には、五言の「渴く」と六言の「成し遂げられた」との御言葉が出ております。それで今日は特に第6番目の御言葉を中心に読んで行きたいと思います。

◆今日の聖書にこうあります。「イエスはすべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渴く』と言われた。こうして聖書の言葉が実現した」とあります。また36節、37節に、「これらのことが起こったのは、『その骨は一つも砕かれない』という聖書の言葉が実現するためであった。また、聖書の別の所に、『彼らは、自分たちの突き刺した者を見る』とも書いてある」とあります。これらは旧約聖書に記されている予言が今、イエス様において実現したのだと、言っているのですね。それでもう一つのことは、30節です。「イエスはこのぶどう酒をうけると、『成し遂げられた』と言い、頭を垂れて息を引き取られた」とあります。これらの御言葉の意味は、旧約聖書に記されている予言がイエス様において今実現した、ということが一つ。そしてもう一つの意味は、イエス様が父なる神様から託された使命、これをイエス様が成し遂げられたという意味がもう一つであります。

◆それで旧約聖書に書かれている予言のみならず、例えば詩篇 23 篇が今、念頭にありますが、「主はわが牧者なり。われ乏しきことあらじ…」先程、ヨハネ伝の「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」に触れました。これはイスラエルの民の信仰を代表的に表明するものです。そして、イエス様において「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」という形において、詩編 23 篇においてまだ十分に明らかにされていなかった、神様の限りない御愛が、イエス様において啓示されたのです。

◆それでこの前はルカ伝にある七言の第一言と二言に触れました。犯罪人に対してイエス様は「あなたは今日、わたしと一緒に樂園にいる」とおっしゃいました。この犯罪人は数時間後に死ぬわけですが。その犯罪人に対してイエス様はこういう御言葉を語られました。私たちはもう一度、聖書を通して示されるイエス様の御言葉が、歴史を貫いて真実である事を確認したいと思います。イエス様が「良い羊飼いは、羊のために命を捨てる」とおっしゃたら、皆さんは聖書の箇所でどういう箇所をイメージされるでしょうか。わたしはヨハネ伝の 8 章 1 節以下に記されているあの物語を思い出したのです。

「姦通の女」という話が 1 節から 11 節に記されております。この女性は姦通の現場を押さえられて民衆の前に、イエス様の前に引き刷り出されます。パリサイ派の者たちにとっては、彼女が目的ではなくて、イエス様をやっつけるのが目的です。するとイエス様は身を起こして言われます。「あなたたちのなかで罪を犯したことの無い者がまずこの女に石を投げなさい」と。この話は、十字架上の犯罪人に、イエス様が、「今日あなたはわたしと一緒にパラダイスにいる」と言われた話と、同じ内容の別バージョンだと思います。彼女はもう絶体絶命で逃げも隠れもできません。その時、彼女を救ったのは正にイエス様の神的知恵というか、本当に人の罪を裁き得るのは誰なのか、「あなたがたの中で罪を犯したことの無い者がこの女に石を投げなさい」とおっしゃったのですね。正にここにイエス様のこの女性を、羊を守るというか、生かすというか、本当に神様の知恵が働いて、こう言われることによって彼女を守るわけであります。一例であります。十字架にかけられた犯罪人と彼女の場合は全く別人生を生きて来たわけですね。けれども、そこでイエス様がおっしゃったこと、なされたことは、同質であります。私達一人一人は個性ある人間ですから、表面的出来事として二つとして同じことはありません。けれどもイエス様は「私は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と、主イエス様は言われました。ですからその時々、知恵を発揮し、助けて下さる。守って下さる。

◆どうかヨハネ福音書の一番最後のページを開いて下さい。21 章の 24 節です。「イエスのなされたことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くなれば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。」これがヨハネ福音書の結びの言葉なんです。ヨハネの福音書の「序言」は荘重です。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と。それに比してこの福音書の末尾は散文的です。しかし私は今回、この散文的結びの凄さを知らされました。

「わたしは思う。その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。」  
今までは、「そうだなあ」位に読んできましたが、これは本当に福音書の締め括りの言葉に相応しい。  
しかも、ヨハネ福音書の結びであるだけでなく、四福音書の締め括りの言葉でもあるのです。

◆なぜかそうか。今日の「成し遂げられた」という言葉ですね。これは先ほど申しましたように、父なる神様から託された使命を実現し、成し遂げ、成就されたということですね。そして「渴く」と言われ、その命を注ぎ尽くされました。実はこの「成し遂げられた」という言葉ですが、この言葉は、ギリシャ語で“テテレツサイ”という一言で、これは、『現在完了形』なのです。ある事が、実現した。成し遂げられたという事だけなら、時制は過去形でいいわけです。しかしこの『現在完了形』は、  
<ある事が実現された。そしてそれは今後も実現され続ける。>このように、一つの行為がなされ、それが継続して行われ続けることを表わしたい時、『現在完了形』を使うのです。ですから、この福音書最後のこの記述は、ものすごいメッセージ、福音なのです。私達一人一人に対して、私自身の痛み、行き詰まりを知り抜いて、神様は、善き時に、善き事を為さって下さる。その御方が、父なる神様と一体であられるイエス様なのです。そういう意味内容を、この結語は含んでいるのです。「主は成し遂げられました。そしてこれからも成し続けて下さいます」。この一言は、過去。現在、未来の全てを抱きかかえている言葉なのですね。この中にこの私達は一人一人もいるのです。

◆聖書は神様がなさってくださったことの証書、証言なのです。今後も為し続けて下さる約束の証書なのです。私たち人間の約束は、時が変わり、状況が変わると、約束を反故にすることがあります。けれども、イエス様はこのヨハネ福音書において、「私はあなたがたを捨てて孤児とはしない」と言っておられます。そしてイエス様は弟子たちに私は聖霊として弁護者として慰め主として戻って来ると言われました。そのようにしてイエス様は本当に私たちと共にいて、救いの御業を為さって下さるのです。イザヤ書 46 章 4 節の御言葉の通りに。「わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」これはすべての人に対する約束です。今日の御言葉、「成し遂げられた」事を、イエス様はこれからも成し続けて下さいます。その中に私達一人一人があるのです。これからもあります。どんな試練に落ちようとも神様はイエス様はその知恵をもって、私たちを守って下さいます。私達はもう一度感謝しつつこの世界の平和の為に、一人一人が大事にされる世界になるために仕えてまいりたいと思います。

◆お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたの憐れみ、慈しみ、まことを、新たに覚えて感謝いたします。ただあなたを信じ、その御言葉にすべてを託し、御心にかなう歩みをなさしめてください。この祈りイエス様のみ名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。